

荒川がもたらした恵み「荒木田土」

相撲の土俵や、野球のピッチャーマウンド、園芸用の土など、様々なところで荒木田土が使われています。



荒木田土を使った土俵築



野球場のブルペンで使われている荒木田土



敷き詰められた荒木田土

荒木田土（あらきだつち）

荒木田土は、昔から壁土や焼物用の土として重宝されていました。特に、東京都荒川区荒木田原（現：東京都荒川区町屋）で採れる土が良質であったため、ブランド名となり荒木田土の名称で呼ばれるようになったといわれています。

荒木田土は、昔の荒川が氾濫し流域に堆積していった土になります。その土質は粘り強く丸く角がないので、国技館の土俵や野球場のピッチャーマウンド、園芸用の土として多く利用されています。

壁土や焼き物の素材として古来より使用

江戸時代の頃より、壁土や焼き物素材として荒木田土が使われてきました。昭和初期頃から徐々に東京での採取量が減ったと言われ、昭和20年代には、壁土として荒木田土の生産は国鉄（現JR）川越線の日進、指扇より貨物にて約1000 tの発送を行っており、更に大久保村地先（現さいたま市桜区）より下流では1日に十数隻の舟による運搬を行っていました。

江戸・明治時代を中心に、台東区今戸や葛飾区、その周辺の区、また渋谷区や足立区、江東区などでも今戸焼が製造されていました。今戸焼は、荒木田土を用いていたといわれ、長く江戸東京の庶民に親しまれてきました。



今戸焼

国技館の土俵に川越産使用

両国国技館の土俵には荒木田土が使われています。以前は東京都荒川区荒木田原の土を使用していたが採取できなくなり、現在では埼玉県川越市で採取した荒木田土を使い土俵築を行っています。

土俵の土は全て交換するのではなく、表面の10cm程度を削り新しい土を盛りクワで削り形を整えていきます。土の総量は約45 tで呼出さんが3日かけて行います。

荒木田土の特徴である粘りがひび割れしにくく、また滑りにくいため土俵に適しています。

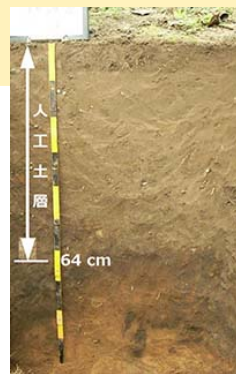


両国国技館での土俵築の様子

コラム ドロツケ ～氾濫土を荒川低地から人馬で大地に運ぶ～

荒川低地より10mも高い大宮台地の西部に氾濫土が乗っている場所があります。これは台地まで氾濫が押し寄せてきたわけではなく、農業に適した氾濫土を河川敷から人が馬の背につけて畑に運んだためです。これをドロツケといい、鴻巣市糠田からさいたま市西区指扇辺りまでの荒川左岸で行われていたようです。

肥よく度に富んだ氾濫土は麦に良いとされ、多くは麦の生長期に根元へ肥代わりに置いたり、次の麦まきの際に使用されました。そのため戦前から昭和20年代にかけて、埼玉県は麦の生産高が日本一になったといわれています。



ドロツケが行われた断面画像

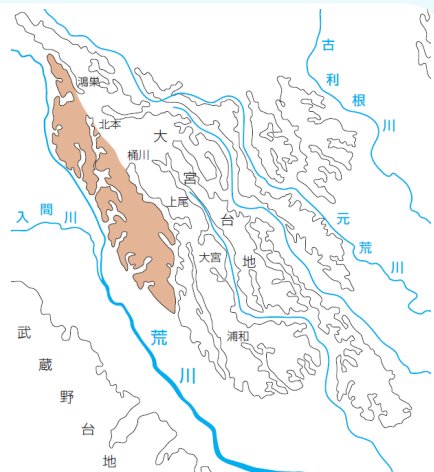
アクセス

ドロツケが行われていたといわれる地域

交通：JR高崎線「鴻巣駅」西口やJR高崎線「北本駅」西口、「桶川駅」西口、「上尾駅」西口から荒川方面へ徒歩約10～15分でドロツケが行われていたといわれる地域周辺へ行くことができます。

住所：埼玉県鴻巣市糠田から埼玉県大宮市五味ヶ谷戸に至る約20km（1983（昭和58）年当時の地域としていわれていました。）

現在では、埼玉県鴻巣市糠田周辺から埼玉県さいたま市西区指扇周辺と考えられます。



ドロツケが行われていたといわれる地域